

私立大学附属幼稚園の魅力に関する一考察

A Consideration on the Attractiveness of Private University and Private Junior College Attached Kindergarten in Japan

濱名 陽子*

Yoko HAMANA

抄 録

この研究ノートは、日本の私立大学・私立短期大学附属幼稚園が、その強みや魅力をどのように表現し、社会に発信しようとしているかを分析している。私立大学・私立短期大学附属幼稚園のうち、32園のホームページを分析した結果、幼稚園以外の学校種を擁する学校法人のなかに設置された幼稚園であることと、大学の施設や教員、学生(実習生)など、大学が持っているリソースを活用できるという、大きく括ると二つのことを強みや魅力ととらえ、発信していることがまとめられた。

はじめに

平成 24 年度の学校基本調査では、日本の私立幼稚園の数は、本園、分園をあわせて 8,197 園であり、平成 14 年度の 8,410 園と比較すると、ここ 10 年間で 213 園減少している。在園児数では、平成 14 年度が 1,399,011 人であったものが、平成 24 年度では 1,314,968 人と、約 8 万人減少している。少子化の進行や働く母親の増加により、私立幼稚園の数は減少の傾向にあり、私立幼稚園にとって園児の獲得は重要な経営課題となっている。

現在日本には、園の名称に「附属」という文言を使用している私立幼稚園が、私立大学と私立短期大学附属をあわせると 234 園存在する。¹⁾ 平成 24 年度において全私立

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

幼稚園に占める比率はわずか 2.9%であり、私立幼稚園のなかでは少数派の幼稚園ととらえることもできるが、これら私立大学・私立短期大学の附属幼稚園はその独自の強みや魅力を社会にアピールしており、その内容を検討することは、今後の私立幼稚園のあり方、また高等教育における幼稚園教員の養成課程と実習園との関係を検討していく際に、貴重な示唆を与えてくれると考えられる。

いっぽうこれまで大学の附属幼稚園という場合、国立大学附属幼稚園が想定されることが多い。日本の幼稚園教育において国立大学附属幼稚園が果たした歴史を考えると、そこへの注目は当然のことであるが、数の上では国立大学附属幼稚園の 5 倍近い私立大学・私立短期大学幼稚園が日本の幼稚園教育、幼稚園教員養成に対して持つ意義に対しても、検討しておくことは必要であると考えられる。

この研究ノートは、私立大学・私立短期大学附属幼稚園の存在意義に関する研究の第一歩として、現在日本に存在する私立大学・私立短期大学附属幼稚園(以下、「附属幼稚園」と略記する)が、その強みや魅力をどのように自覚し、社会にアピールしているかを分析することを目的とする。

I 幼稚園成立期における国公立幼稚園の役割

日本で大学附属幼稚園という場合、その設立の歴史的経緯からみてまずは国立大学の附属幼稚園が想定される。現在日本には、49 の国立大学附属幼稚園が存在しており、それらは日本の幼児教育の世界で重要な役割を果たしてきた。

周知のように、日本で最初に創設された幼稚園は、1876（明治 9）年に創設された東京女子師範学校附属幼稚園である。その創設に際し当時の文部大輔であった田中不二麿が大きな役割を果たしたといわれているが、のちに田中は、附属幼稚園の開設には 3 つの目的、すなわち第一に幼稚園の模範を示すこと、第二に教育の発展を図ること、第三に女子師範学校生徒の実習に資するという目的があったと述懐している。²⁾ 日本で最初のそして師範学校の附属としてもはじめて設置された幼稚園の設置の目的に、師範学校生徒の実習に資するという目的があったのである。

1877（明治 10）年には、東京女子師範学校附属幼稚園に保姆を養成する一科を設け、保姆見習生を受け入れて、保姆養成を行うことになる。保姆見習生は、幼児がいる間は実地保育の練習をし、幼児の帰宅後に式部寮雅楽課の怜人による音楽の教授や松野クラ

ラによる恩物理解および保育理論の講義，保姆豊田英雄による講義と恩物の製作等の実習が行われていた。³⁾

そして1878（明治11）年，東京女子師範学校は文部省に対して「幼稚園保姆練習科」の設置を求める伺いを提出する。そこでは，小学校教員を養成する師範学校は整えられているのに，幼稚園保姆を養成すべき「模範幼稚園」が全国に一つもないのは一大欠点であるとして，東京女子師範学校附属幼稚園に保姆養成機関としての役割を持たせることが主張されている。伺いは幼稚園の改称の件を除き裁可されたが，生徒募集を行っても応募者はほとんどいなかったため，同年には給費生を設けることとなり，1879（明治12）年3月には給費生5名と，自費生6名の11名が入学することになった。1期生1880（明治13）年に卒業した後，全国各地の幼稚園設立・発展に保姆として尽力することとなる。⁴⁾

この幼稚園保姆練習科は，しかしながら，1期生を出した直後に廃止される。その後は，保姆不足が大きな問題になっていくも，県から派遣された見習生を本科課程に受け入れて聴講させるという便宜的な措置を取らざるをえなくなっていく。日本での保姆養成は，幼稚園での保育見習方式による簡便なものにとどめられたのである。

そのようななかでも，その後各地に設立されていった幼稚園では，保姆の養成が目的のひとつとされていく。たとえば1879（明治12）年に設立された鹿児島女子師範学校附属幼稚園では，幼児の教育のみならず保姆の養成にも尽力していた。また高知県や愛媛県，秋田県，新潟県などでは，女子師範学校に幼稚園を付設する計画が立てられており，1879（明治12）年の「新潟県年報」には女子師範学校附属幼稚園の必要性として，女子師範学校生徒の実習の場として，また父母に家庭教育の何たるかを知らせる場として有用であることが述べられている。⁵⁾

また1879（明治12）年に開園した「大阪府立模範幼稚園」は，その役割として第一に，幼児期の教育の充実および小学校入学の予備教育機関としての役割，第二に，保姆の養成機関としての役割，第三に，母親教育の場としての役割，第四に，母親の労働を保障する託児施設としての役割の四点があげられ，模範幼稚園内に「保育見習科」と「保姆練習科」を設置している。⁶⁾ 後者の「保姆見習科」は，東京女子師範学校附属幼稚園保姆練習科に倣って設置されたものである。

以上のように，明治以降に国や地方自治体で設置された幼稚園は，幼稚園教員養成の役割を担っていたことがわかる。幼稚園のこの役割は，現場での見習方式による幼稚園

教員の安易な養成方式ということもでき、幼稚園教員養成の充実という面からは、問題として指摘されるものではあるが、幼稚園現場にもともとそのような役割が期待されていたという点は、歴史的経緯として興味深い。

II 現在の国立大学附属幼稚園の役割

現在、国立大学附属幼稚園には、どのような役割が期待されているのであろうか。文部科学省は2009（平成21）年に、文部科学大臣決定として「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」を通知し、そのなかで、「2 教育研究、運営等の業務全般の見直し」の「（1）大学の教育研究等の質の向上」として、「⑦附属学校の機能の充実・強化」を求めている。そして、附属学校は、学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力することや、教育実習の実施への協力を行う等を通じて、附属学校の本来の設置趣旨に基づいた活動を推進することにより、その存在意義を明確にしていくことが必要ではないかとし、大学運営、教育行政、教員養成等に精通した有識者による検討結果を、「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」という形でとりまとめている。

ここでは現状と課題として、(1)組織運営上の問題と(2)業務運営上の課題のふたつがあげられており、(1)については、学長とリーダーシップによるマネジメント機能の発揮が不十分であること、大学・学部教員の附属学校の教育活動への関わりが希薄であること、地域の教育界の意向が附属学校の教育研究活動に十分に反映されていないこと、があげられている。(2)については、大学・学部における教育に関する研究への協力については大学・学部の研究方針に基づくものではなく、附属学校が独自の立場で取り組んでいるものがほとんどであり、また教育実習においても、附属学校に任せきりになり、大学・学部の側が責任を持って実施する体制になっていない、ことがあげられている。このような課題に対する改善方策として、第一に附属学校の存在意義の明確化、第二に組織運営上の改善、第三に業務運勢上の改善が提言されている。

このような動きを見るに、現在国立大学附属学校の存在意義に関して、大きな課題があると考えられる。無籐らは、国立大学附属学校・幼稚園の役割として、①大学教育への一層の貢献、②大学との連携等による研究、③実践的資料の作成と提供、④外部への研修機会の提供、⑤人材の育成の5点をあげている。⁷⁾ 具体的には、①については、教職課程の教育実習以外の「観察実習」や「インターンシップ」まで協

力関係を広げること、附属学校の教師が大学の教職課程の講師となること、附属で大学の授業を行うこと等があげられている。②については、附属学校が大学との連携による研究を行う、大学での基礎的な研究の場を提供する、大学教員が保育実践の公開に向けての助言者となる、実践研究をともに進める、③については、カリキュラムや教材・指導法等について、自らの実践を基礎として資料を提供すること、④については、公開保育を行う、定期的な研修機会を提供する、園内研修を公開する、附属の教員を講師として外部の学校等に派遣する、⑤については、公立学校との交換人事を行い、附属の現職教員の人材育成を行う、数週間から年単位での実地研修の場となることをあげている。

しかし無籐らは、現実には必ずしもうまくいっていない面も指摘している。たとえば②の研究面での連携については、連携関係が表面的に終わりやすい、附属の教員の研究者としての位置づけが足りない、大学の研究者の論文となりにくい、連携のための組織が弱い、といった問題点を指摘している。また④の附属学校の研修機関としてのあり方については、地域の実質的な研修の中心となっていない、研修の中身が充実していない、教員の指導力の改善に十分には役立っていない、公立の水準の向上と改革の速度に追いついていかない、といった問題点を指摘しており、附属学校・幼稚園が必ずしもうまく機能していないことを示唆している。⁸⁾

Ⅲ 私立大学・私立短期大学附属幼稚園の強み・魅力の発信

それでは、現在の日本の私立大学・私立短期大学附属幼稚園の存在意義についてはどうだろうか。私立大学・私立短期大学附属幼稚園は、大学の附属であることをどのように強みとしてとらえ、また発信しているであろうか。現在日本に存在する私立大学・短期大学附属幼稚園 234 園のうち、ホームページで確認できた 32 の私立大学・短大附属幼稚園について、ホームページ上の園の紹介のなかで、大学の附属であることの強みや魅力をどのようにうたっているかをまとめる作業を行った。以下ではそれをまとめてみる。

①幼稚園教員の資質向上・力量形成

まず第一に、何よりも大学と連携することにより、当該幼稚園の教員の資質向上と力量形成が可能となることをうたっているケースがみられる。たとえば、華頂短期大学附

属幼稚園の紹介には、下記の記述がある。

華頂短期大学と連携をはかり、常に「幼児教育のあるべき姿」を追求し、さらなる研鑽・実践をしています。

また幾中央大学附属幼稚園の紹介には、下記の記述がある。

幾中央大学教育学部現代教育学科と連携して、幼稚園教諭としての力量を高め、よりレベルの高い教育実践を行うよう努めています。

このように、大学の幼稚園教員養成課程と連携することにより、附属幼稚園の先生方の教員としての資質や力量が高まり、より質の高い保育が行われていることをアピールしている。

②研究面での連携

①とも関連するが、研究面での連携をうたっているケースが見られる。たとえば武庫川女子大学附属幼稚園の場合は、大学と共同、連携による幼児教育の研究をうたっており、また武蔵野短期大学附属幼稚園の場合は、先進的な研究フィールドとなることを明記している。

具体的な研究内容をあげているケースもみられ、聖徳大学附属第二幼稚園では、園の特色として、「毎月の保育カリキュラム（指導案）は大学と幼稚園が一貫した教育思想のもとに検討立案し、家庭にも配布し、保育効果を高めている」ことをあげている。また美作大学附属幼稚園においても、短いフレーズではあるが、「大学附属幼稚園としてのすぐれた環境と、新しい保育方法の研究」という表現が用いられている。

③大学や法人との一体的経営

次に私立幼稚園として歴史があり、また経営が安定している総合学園、学校法人のなかに設置されていることをうたっているケースが見られる。例をあげると、以下のような文言が見られる。

・創立から 90 有余年を迎え幼稚園から大学までを有する総合学園として発展（安田女子短期大学附属幼稚園）

・大学、短期大学部、附属高校、附属中学を併設する総合学園の中にある幼稚園（宇

部フロンティア大学附属幼稚園)

- ・幼児教育教員養成機関として長きよき伝統を持つ、つくば国際短期大学の附属幼稚園(つくば国際短期大学附属幼稚園)

- ・本学園は創立 113 年を迎え、中・四国・九州有数の総合学園に発展するとともに、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学部・大学・大学院(博士課程)と一貫教育体制を整え、優秀な人材の育成に専念(徳島文理大学附属幼稚園)

- ・照ヶ丘幼稚園は、大阪芸術大学グループの附属幼稚園です。そのため、学院全体のサポートを受け、教職員、各部署と綿密に連携し、園の運営にあたっています。(大阪芸術大学附属照ヶ丘幼稚園)

- ・本園は、歴史ある武蔵野学院の支援のもと・・・(武蔵野短期大学附属幼稚園)

これらは、同一法人のなかに複数の学校種を設置していることのメリットを積極的に打ち出し、私立幼稚園としての経営の安定性、信用を発信しているものととらえられる。

④建学の精神の一貫性

同一法人のなかに複数の学校種を設置していることのメリットとしては他に、建学の精神が一貫していることをうたっているケースが見られる。

たとえば、徳島文理大学附属幼稚園の場合は、園の基本方針として、「徳島文理小学校、中学校、高等学校につなぐ教育を行います。学園の建学精神である『自立協同』を基本的な理念にしております。幼稚園はこの基本理念に基づく教育を最初に行う場です」という表現がみられる。また函館短期大学附属幼稚園の場合は、学園の一貫教育は幼児教育に始まることを明言し、学園の建学の精神である学園 3 か条(「報恩感謝」,「常識涵養」,「実践躬行」)を、「おとうさんおかあさんありがとう」「すなおにただしくおぼえましょう」「すすんでよいこといたしましょう」というように、建学の精神を幼児バージョンに置き換え、その精神に基づいた教育が行われていることをアピールしている。さらに、つくば国際短期大学附属幼稚園の場合は、「学校法人霞ヶ浦学園(四年制大学・短期大学・高等学校・幼稚園・保育園)は、その建学の精神を『白梅』に託し、『寒苦風雪に耐え(忍耐力)、他にさきがけて花開き(先駆的前進性)、やがて立派に実を結ぶ(実効性)』という花実両全の姿を、本学の理想としてまいりました。本幼稚園におきましても、この理想像をさらに進化させ、一人一人の子どもをよく理解し、家庭的な雰囲気の中で、のびのびとした明るい個性豊かな

子に育てたいと思っております。また、よいことや悪いことの区別、他者への思いやりや、社会的ルールを育てるなど、幼児期における心の教育を一層充実させてまいります」という表現がみられる。

このような表現は、ひとつの学校法人のなかの複数の学校が、すべて一貫した建学の精神、明確な教育理念・教育方針の下で教育を行っていることを打ち出しているものであり、私学教育が本来最も大切にすべき教育理念・教育方針の強調であるといえる。

⑤一貫教育の実質的なメリット

次に、同一法人のなかに複数の学校種を設置していることの実質的なメリットをうたっているケースがみられる。

まずひとつは、大学や短期大学に附属幼稚園の卒園児が入学する場合に、入学金免除の制度をとっている場合や、附属小学校への入学に際し、内部進学制度（優先枠）や推薦入学制度を設けているケースがある。

次に、同一法人内の学校の施設や設備を利用しての保育をアピールしているケースがある。大学・短大や高等学校などの広いグラウンドや体育館を利用しての体育遊びや、講堂、音楽室、造形室や茶室などの、日常保育や生活発表会、音楽会での活用である。

さらに、大学・短大の教員による心理相談や、音楽や体育指導、美術指導、食育指導、英語指導を受けられること、また大学・短大の教員による保護者向け講演会などが可能であることを積極的にアピールしている園が見られる。これらは、大学・短大が持つ、人員面や施設面でのリソースを最大限に活用しようとするものである。

⑥実習生の受け入れ

最後に、大学・短大の教育実習を受け入れていることをメリットとしてあげているケースが見られる。教育実習生が園に入ることが、幼稚園に在園している幼児や保護者にもたらすメリットとしては、下記のことがあげられている。

ひとつは、大学生との交流が、在園している幼児に豊かな体験を与えてくれるという面である。このことを表現している文言には下記のものがある。

・「希望と意欲に満ち溢れた学生たちの実習やボランティア活動が年間を通して活発に行われ、子どもたちにとっても多くの体験を通じた成長が期待できます」（華頂短期大学附属幼稚園）

・「学生と園児とのあたたかい交流は深く、学生と一緒に作った遊具で遊んだり、人形劇を見せてもらったり、大学の附属幼稚園ならではの楽しい経験をしています」(美作大学附属幼稚園)

・教員志望の学生と子どもたちの交流を深め、相互の成長につながる教育実践を行います(幾中央大学附属幼稚園)

・本園は保育学科の「教育実習の場」でもあり毎日の生活の中で幼児と保育学科学生の連携を計り、共に学びあう教育の場を創造する。(東筑紫短期大学附属幼稚園)

・本学短大生の実習が〇月に行われます。また、他の短大や大学からの実習生もあり、子どもたちはいろいろな人とかわり、社会性を育てています。(千葉敬愛短期大学附属幼稚園)

もうひとつは、山陽短期大学附属幼稚園のように、「山陽学園短期大学の教育実習の場として、年間を通して幼児教育学科の学生さんが教育実習に来ています。“たまご”とはいえ、みんなちゃんと先生です。子ども達はたくさんの先生の目の届く場で安心して遊ぶことができます」ということをうたい、多くの目のなかで育つことにより、安全や安心の点でメリットがあることをアピールしているケースも見られる。

おわりに

以上のように附属幼稚園は、6つの面において、その強みや魅力を意識し、発信していることを見てとることができた。これらをさらにまとめると、幼稚園以外の学校種を擁する学校法人のなかに設置された幼稚園であることの強みと、大学の施設や教員、学生(実習生)など、大学が持っているリソースを活用できるという魅力の二つに大きく括ることができる。法人や大学に附設されていることを、附属幼稚園はさまざまな形で強みとして発信しているのである。

とりわけ注目したいのは、大学の実習生を受け入れているということ、附属幼稚園の強みととらえている点である。前半で触れたように、国立大学附属幼稚園は師範学校生の実習に資することが目的とされ、また幼稚園自体に教員養成の役割が担わされていく戦前の歴史的経緯があったわけであるが、私立大学・私立短期大学附属幼稚園の場合は、このことをむしろ幼稚園経営の点での強みととらえる傾向が見られる。今後は、実習生の受け入れの実態をさらに詳細に検討し、幼稚園教員の養成に果たす附属幼稚園の役割をさらに検討していきたい。

注

(1) 私立学校振興・共催事業団のホームページより，学校法人情報検索システムの学校情報検索で検索した結果である。

(2) 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房 2001年 212頁

(3) 湯川嘉津美 前掲書 233頁

(4) 湯川嘉津美 前掲書 238頁

(5) 湯川嘉津美 前掲書 248頁

(6) 湯川嘉津美 前掲書 260頁

(7) 無籐隆，岩立京子，倉持清美，西坂小百合，森下葉子，青木聡子「保育者研修において附属幼稚園が果たす役割ー幼児教育未来研究会を通してー」『子ども発達教育研究センター紀要』1 2004年 1頁

(8) 無籐隆他 前掲論文 2頁

Abstract

This research note attempts to explore the attractiveness of private university and private junior college attached kindergarten in Japan. As a result of analyzing the homepage of a private university and a private junior college attached kindergarten, I found the two strong points each kindergarten appeals. First point is that the kindergarten exists in the educational foundation which has school kinds other than a kindergarten. Second point is that the kindergarten can utilize the resources of university or junior college, for example college institution or equipments, college teachers, college students and so on.